

菊池短歌会

3月詠草

ひそやかに来たる客人霜解けの枯葉押し上げ福寿草燿る 岩永 典子
この橋を渡れば界も展くべし軽く押しゆくシルバーカーも 氏岡 百枝
青空へ音符のやふにはじけ出て山茶萸の花は歌ふがごとし 梅田 昭子
うかうかか如月も早やゆきにけり冴えたる短歌も成らず終ひて 梅野かをり
桃の花咲き初めし路地走り来て園児ら互に小さき指さす 黒田 衣子
幻に川の行方を辿るなり今このままの岸葉咲かせて 竹野美智代
軒近く山茶花咲かせ梅咲かせ独り世すぎにめぐる春の陽 中原ちえ子
思はずの陽気に触れて梅の花まことほのぼの集落明かり 村上 咲江
帳簿より解き放たれて五年経ちペン胼胼いつか指より消ゆる 山代 静子

裏庭に春椎茸の二つ三つ 茨木 幸子
惚の芽の一日と緑濃く 緒方 玲
紫雲英田に遊びし友は今は亡く 松永 久子
鳥雲に散歩の犬は叢に 中路 郁子
ふるる風まだ尖り居り啓蟄日 高木 陽子
花辛夷みんな仰いでゆく通り 鋤本 トミ
江の電の一日切符春の風 田中ひさ子
少年の追越すべタル春の風 東 鈴子
離れ住む孫の便りや梅開く 稲田 玲子
咲き誇り木蓮天空狭くせし 斉藤 貴恵
茎立ちて畑のあちこち彩どりぬ 梅田 昭子

肥後狂句桜会

3月例会

内助の功お陰で受賞出来ました 東 栄次
本領発揮 上手取つたら電車道 窪田 明德
のさんねえ 長挨拶の始まった 高倉 新米
意地っ張りだけん一人で暮らしきる 光堀 善教
勝手なもん 相続したらうち売った 田中 孝幸
意地っ張り理想落とさにとつた 北村 竹刀
本領発揮 爆発しとる強打線 安武 二山
のさんねえ やつと慣れたら又異動 藤由 藤紫
意地っ張り 白も黒てち言い通す 小川 繁美
内助の功 捕手の殊勲にさすエース 太田 雄三
勝手なもん 死ぬ程好きて言うという 狩野 本六

のさんねえ 齒ぎりしり止むと大イビキ 須藤 新生
白梅は満開に枝張り匂う今年何斗の実を結ぶらん 内田つね代
一輪の真紅の椿笑むごとし雪の三千段真白を登る 高藤タツノ
午後の陽が照りわたる庭を恋猫がわがもの顔に横切り行けり 中山 定子
自然繁殖一〇〇羽と言わぬ鴨の群れ裏の川面に溢るる平和 福原美智子
成人の記念に孫が頂きし白梅満開朝夕仰ぐ 藤本のり子
春の陽の輝やく青空澄みており強烈に走る一朶白雲 宮本 峯子
見映えせぬなすなの花が間伸びして春に先がけ咲きてそよげる 大島 ひとみ
枝垂梅ほしいと思う植木市八十六歳買わずに帰る 長尾はるみ
得意気に片手を振れる小走りの幼見守る氣を採みながら 平嶋きくえ

泗水短歌会

3月詠草

万句の里俳句会

3月句会

銀色の刺徒へて惚芽ふく 富田 幸子

せせらぎ俳句会

3月例会

土と語ることも楽しや畑を打つ 藤本 邦治
せせらぎの砂地に残る蝮の道 吉岡 民子
貝母いま盛り見せたき人は来ず 坂本まつえ
眠る児の手よりこぼせし花なすな 藤本アツ子
独りには惜しき春日をひとりなる 村山 数恵
菜の花の彩を映して春満月 内村 泊虹
草餅の黄粉匂はせ供へあり 五丁 義昭
馬の仔の体に光る牧の泥 寺本 和子
乾杯の音頭は男雛の宴 服部 静子
福寿草探し狭庭を幾巡り 内村 鈴子
小学校いよいよ卒業さびしいな 内村 鈴子
桜並木つぼみふくらみ卒業式 内村 鈴子

七城短歌会

3月詠草

にやーわん 美女が千鳥足で行く 美 由
にやーわん 服も化粧もその歳で 乗 仏
ちよびつとこつちまわしてくれんとか 三 水
じねーんと愛の鞭でち分かるだろ 千 笑
おちよくん なよか縁談もまたらん 美 樹
にやーわん あたが真面目なつらしても 好 茶

旭志文芸俳句会

3月詠草

阿蘇枯野風車に夕日擲みおり 芹川のり子
鞍岳の深霧吸いし名茶汲む 出田みどり
逝く水は帰らず庭の梅古木 芹川 蓉子
槌を打つ音変りたるみそれかな 水谷 ミネ
紀元節を知る輩の皆逝きぬ 東 芳子
見送りの喪着にほんのり梅香る 中山 栄子
枯れ蓮の池より寒さ広がり 岩根サチ子
朝戸出に梅一輪を見届けし 中尾ヨシコ
寒強し春草だけは伸びて行く 郷 ミヤ子
猫の恋えさ食み早々出でゆきし 岩根 良子

肥後狂句水笑会

3月例会

おちよくん たいぎやーえらい人だけん 水 光
ちよびつとこつちが財産分けかいた 左 党
にやーわん その体型にロングてな 五 女
おちよくん 俺の頭は広辞苑 英 坊
ちよびつと 瘦せた瘦せた大騒ぎ 梅 月

おわびと訂正

4月1日号に一部誤りがありました。おわびして訂正します。
14ページの広報文芸きくち「肥後狂句桜会」の7句目、9句目、12句目
誤(×)玉に暇
正(○)玉に暇
※玉に暇 母乳の出らんFカップ 大田 雄三
※玉に暇 尻尾屈ばかり押し通す 北村 竹刀
※玉に暇 シャンだけど愛嬌の無ア 須藤 新生